

●コレクション・データ

時代：弥生時代前期  
調査：唐古・鍵遺跡第23次調査  
発見年：1985年  
大きさ：頭の長さ27.2センチ  
幅20.9センチ  
展示位置：第1室  
「唐古・鍵ムラの人々」



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 17

発掘された弥生人骨

(複製品)

1985年、唐古池の東側堤防の発掘調査で、2体の弥生人骨が発掘されました。

人骨は、板を組み合わせた棺に入れられており、2300年の間、灰色の粘土でパッキングされたことになりました。このため、人骨は腐ら残ったようではありません。大半の骨は豆腐のような状態でしたので、土ごと持ち帰り、東京大学の埴原和郎・馬場悠男両先生に鑑定してもらいました。馬場先生により豆腐のような人骨は保存処理され、見事に頭骨が現れました。この人骨は、20代後半から30代前半の男性で、162センチと長身です。顔は面長・扁平で、これらの特徴から大陸や朝鮮半島からの渡来人と考えられます。

現代の日本人の顔は、丸顔で二重まぶたの人と、面長で一重まぶたの人の2つのタイプがみられます。前者は縄文時代の人骨と、後者は渡来系弥生人骨の人骨と特徴が一致することから、現代の日本人は、古くから日本列島に定着した縄文人が、

弥生時代以降、渡来人との混血を繰り返しながら形成されたと考えられています。

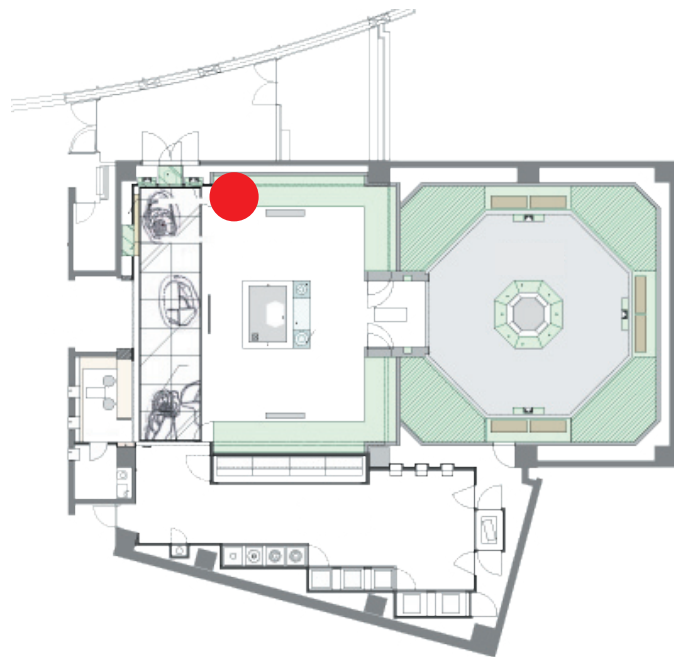
かつて金関丈夫氏は、山口県土井ヶ浜遺跡で多量の渡来系人骨が出土したことから、大陸や朝鮮半島からの渡来人が、弥生文化の伝播に大きな役割を果たしたと考えました。しかし、渡来系人骨は、前期終わりごろの資料が大多数で、弥生時代の開始とは年代的な開きがあり、渡来人出現の背景については、検討の余地が残ります。

さて、これまで渡来系の人骨は、北部九州から山口県に集中し、弥生時代の渡来の規模は、地域的に限られた現象とされてきました。唐古・鍵遺跡での渡来系人骨の発見は、こうした考えを覆すもので、弥生時代の近畿にも渡来系の人物が存在したことが明らかになりました。

唐古・鍵ムラの渡来系の男性が、何処から何故やって来たのか。ムラの成立とともに人骨が提起する問題は、奥深いものがあります。

唐古・鍵考古学ミュージアム

【 ☎ 34・7100 】  
開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）  
休館日 毎週月曜日  
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金）  
▼大人 2000円（1500円）  
▼高校生・大学生 1000円（500円）※15歳以下は無料



ミュージアム上面図と展示位置